

劇あそび

ひよこのさんぽ

関 治 子

「ひよこのさんぽ」の意図

家庭にいる四才のある子供が、ある日、ラジオの傍で遊んでいました。ちょうど幼児向の番組だったのですが、身体を小さくしたり、四つ這いになったりしています。よくみてみると、ラジオで「さあ、雪のお山の中に熊さんがねていましたよ。熊さんになってみましょうね。」というところ、そのようすをしており、「今度はスキップで……」というところスキップのようすをしているのでした。この年令の子供たちは、その場のようすにおじけたり恥しがったりさえしなれば、実に楽しそうに又素直に表現するものです。

幼稚園では三年保育又は二年保育のはじめの頃の自由表現に、出来るだけ表現し易くて子供たちのよく知っているものを折りこみますが、その一つに身近の動物はよくとり上げられます。犬や猫、にわとり、ひよこなどでしたら、その子供の家でも飼っているかも知れませんが、見た事のない子供は恐らくないでしょう。

自然にリズム遊びをして交る交る動物が出てくるうちに一つの劇あそびの形へと発展するのではないか。これは、初歩の段階の自然な劇あそびへの導入ではないだろうかと考えました。又、身近な親しい動物のなき声やようすをよくみるという機会もつくるのではないのでしょうか。むつかしく考えますと、自然や環境というものを注意深くみたり知ったりする機会をも投げかけるのではないのでしょうか。こんなむつかしいことも一方では思いながら、ピアノを弾き弾き動物の自由表現から、劇あそびの形へと発展させてみたのです。

「ひよこのさんぽ」はちょうど、このお話の子供たちが、とても興味深く喜んでくれたので、自由表現の中に、このひよこを加えてみました。

自由表現のリズム遊び

動物の行進その他小さい曲や和音などでそれぞれの動物にふさわしいリズムをあらわし、子供たちと自由表現をしました。

ひよこ、猫、犬、豚、山羊、牛、兎、り

す、猿、小鳥、あひる、にわとり、など。
この場合、表現するのに、余りに似通ったものをつづけてさせたりしますと、どれもこれも同じ型になってしまいがちです。で、リズムで、ずっと違う感覚を明示することが必要かと思ひます。

劇あそびの形へ

リズム遊びをしていると、子供たちは、表現の足りない所を、「ビヨビヨ」「ワンワン」というようになき声で補っています。これは、リズム遊びとしてはいつまでもこのままですと、純粹の自由表現には障礙となる事も考えられますが、劇あそびとなるとむしろ、このなき声を大きくとり上げて、大いに発表力を引き出す事が出来そうです。

ひよこのさんぼは、紙芝居になって居り子供たちも喜んで何度も見聞きして居ります。私か、私が経験しました二年保育の組では、ひよこのおかあさん役には女兒がなりまして、ままごと遊びのおかあさんのように自然に「おむかえに来ましたよ。」などと

云いました。せりふは出来るだけ、なき声、挨拶などを中心とし、自然に出たことをとり上げました。

動物のなき声が出ますと、次にはそれぞれ犬小屋やさくを廻らしたり、草原などはまわりの雰囲気を出すように音楽を入れたり小道具を簡單においてみたりははじめました。

交替で子供たちがいろいろな動物を経験してから、なりたいたものに分れてきめ、お面をつけました。

お面は三才もしくは四才児の入園当初の場合として考えますと、子供だけでは、なかなか出来憎いので、先生と一緒に形どってつくり、出来たお面をつけて、そのものになり切って楽しむという方に重点をおいたらよいと思ひます。

幼児の劇あそび集「ひよこのさんぼ」では二場にわけましたが、これはバックの關係から、本来は、ひよこがさんぼに出かけていろいろな友だちに会ったりお話をしてくるのでから全体が一場でもよいと思

います。

経過とあらすじ

順を追って経過をたどり、旁々あらすじをかいてみる事に致します。

はじめは家の中にいる動物として猫、犬、家の周辺に飼っている動物として豚、山羊、ひよこが出てきます。猫は呑気にひるねをし、犬は留守番をつとめます。何れも疑人化してはあるのですが、特にひよこは、ちょうど子供たちのようで、さんぼにはじめて一人で行くので皆に気を配って貰い、自分でもうれしく出て行くわけです。豚は一見つまらないようですが、なき方が可愛いのか子供たちは喜んでいました。豚も山羊もひよこがさんぼに出かけるのを見送ります。

次にひよこは家のまわりから広い草原に行き牛がいるのを見つめます。牛は草を食べていました。森の方に行こうと思っていると兎たちが出て来ました。子供たちは兎が表現し易いのと愛着が持てるでしょうかととても好きですから、ここで兎とび競争な

として遊んでも面白いと思います。

ひよこは、兎と又の機会に遊ぶことにして森を通ります。ここで、はじめてりすという動物に会って知るわけです。りすも可愛い動物で子供たちは好きですが、実際の動きを案外知りません。親しまれている動物だけにこういう機会に動物園にでも行った時にはよくみてくるように仕向ける事も必要だと思います。ここでは、絵などの影響もあってか木の実を食べたり木の周りで遊び、お水のある所をひよこからきかれます。

森には猿が手をつないで並んで出て来て猿のぶらんこをしてくれます。これは、手をつないでいることであらわし、ぶらんこのうたをうたいました。

ひよこはすっかりのどがかわいてしまい羽ばたいて出してきた小鳥にお池に行くように教えられます。

あひるが池のほとりに連れて行ってお水をのませてくれました。

ひよこのおかあさんもおむかえに来て、

さんぽしてたくさんのお友達が出来た事を喜び合いました。

小鳥やあひるなどは好きなようにとびまわったり、ゆっくり歩き廻ったりでよいのですが、皆になき声と挨拶（行っていらっしやい）、簡単なお話（お水がのみたいの）はたとえ一言でも云うようにしました。

又、この劇あそびは、紙芝居で扱っているように一から十までの数を扱って数の概念を遊びの中からうえつける事も出来ません。しかし、私としては、組の人数に従って、多勢の組は多勢なりに人数も動物の種類も多くする事が考えられますし、人数の少い組たとえば三年保育の二十名足らずの組でしたら、一人が一種類の動物になってもよいし、二、三人ずつして、いろいろな動物をお面を替えて試してみてもよく、人数と種類に巾を持たせたらよいと思つて居ります。

劇あそび集にのせてあります言葉は四才児の時にしてみたもので、紙芝居やお話で話し具合を聞き覚え、あのように整つたよ

うになりましたが、これも年令や時期に応じて、もっと単純でよいと思います。又、軽い受け答ですから、一回ごとに違わせりふになつてもよいと思つています。

動物の自由表現をして遊んでいて、お面をつけてうれしくて大変喜んでゐる子供たち……そんな状態のまま一応まとまつた形の劇あそびをして遊んでいたというような結果を持つとすれば、子供たちに無理を強くない自由な劇あそびの進展ではないかと思ひます。勿論、他の題材や他の目的も劇あそびにはある事ですから、ひよこのさんぽの場合にはこんな行き方をとつてはと思つたのです。

（お茶の水大附属幼稚園）